

同志社とファシズム

一

同志社というと、すぐファシズムのことをおもい、ファシズムというと、すぐ同志社のことをおもう。同志社とファシズムとはそれほど分ち難く結びついてわたしの思い出のなかにある。どうしてなのか？ これにはわけがある。次の二つの事情がこれを示している。

一、わたしが同志社にいた昭和六年から十二年までの時期は、わたしにとって自分が手がけていたファシズム研究の目鼻がようやくつきはじめた時期で、わたしの研究生活の上できわめて重要な時期であったこと。

二、わたしが同志社において蒙ったファシズムからの弾圧は、その後苛烈になった、わたしに対する弾圧の序曲みたいなもので、今から考えると大したものではなかったが、わたしにとっては自分が身をもって受けとめた最初の弾圧であっただけに、忘れがた

いものがあったこと。

次にこれらの事情についてお話することにしよう。

二

具島兼三郎

わたしがファシズムの研究を志したのは、まだ同志社に着任する前、すなわち九州大学の助手をしていた頃であったが、わたしがこのような研究テーマをとりあげたそもその動機は、やはり同志社となりがしかの関係があったといってもよい。というのはわたしがファシズムの研究を自分のテーマとして選んだ直接のキッカケとなったものは、ヒルファーディングの「金融資本論」を読んだことにはあったが、この本の訳者は同志社大学教授林要氏であったからである。林要さんという名前は以前から知っていたが会ったことはなかった。しかし、ヒルファーディングの「金融資本論」は前から一度よんでみたいと思っていたので、林さんの訳書が出るとすぐ、それを貪るようにしてよんだ。これは読み棄て

にすべき書物ではないと思つたので、赤鉛筆を入れたり、書きまきをしたりしながら、繰り返し、繰り返し読んだ。ところが、この書物のなかに、金融資本は一定の歴史的条件の下においては経済の領域におけると同じように、政治の領域においても独占を求めようになるということが指摘され、議会制民主主義が金融資本の意に添わなくなったときに、それに代るものとして金融資本が要求するであろう政治形態としてファシズムがある旨が説かれていた。ここではファシズムがただそういうものとして示唆されていただけで、そのファシズムがどんな政治形態なのかということの詳しい説明はなかった。

「そうだ、これだ、俺のこれから研究すべきテーマは、」
と、わたしは思わず膝を打って叫んだ。それ以来というものは明けても暮れてもファシズムで、わたしはファシズムの研究にとり憑かれたようになった。

ところが運命というものは面白いもので、わたしは九州大学の助手の任期満了とともに、林要さんのおられた同志社大学に御厄介になることになったのである。当時同志社大学には林さんのほかに、現在同志社の総長をしておられる住谷悦治さんとか、「資本論」の翻訳者として有名な長谷部文雄さんなど、有能な先輩諸氏がおられたので、いろいろな点でそれらの方々の指導を受けることができた。よい先輩は沢山おられたが、研究費の方はあまり潤沢ではなかった。そこでわたしは少ない研究費をもっとも有効に使うことを考え、それには重点主義でいく以外にないと思つた。研究費の大半をファシズム関係の文献や資料の購入に当てたのは

このためであった。こんなわけで、文献や資料の方もだいたい集まり、研究も着々と進んだ。

しかし、さてその成果の発表ということになると、ハタと当惑した。わたしは九大法文学部も第一回の卒業生なので、論壇にも学界にも、先輩というものは一人もいなかった。こんなわけで自分の書いたものを発表しようにも、すまいにも、手蔓というものがなかった。

「どこか発表できるところはないものかなア」
と思つていたら、林さんから長谷川如是閑が「我等」という雑誌を出しているので、それに書いてみないかとお話である。

「お願いします」
というわけで、立て続けに何本か「我等」にファシズムに関する論文を書いた。そのころ日本ではまだファシズムの研究を本格的にやっている人はいなかったもので、「我等」の論文がいろいろ人達の眼にとまった。

「ウチの方にもぜひ書いてくれ」
と、多くの雑誌から発表の機会をあたえられるようになったのは、そのためであった。このようにして、協調会から出されていた「社会政策時報」や、東大の「国家学会雑誌」などにも、書く機会をもつようになった。

書物の方も出版してくれるところが出来て、「ファシスト 国家論」(千倉書房)とか、「ファシズム独裁下の労働統制」(政経書院)とか、今から考えると冷汗の出るようなものを臆面もなく出した。若気の至りというべきであろうか? 書物といえは、こんなこ

とがあった。唯物論全書の一冊にファシズムが加えられ、それを今中次磨先生とわたしで書くことになり、原稿を書いて机の上に積みあげておいたところ、加茂川の洪水である。その頃のわたしは下鴨の松ノ木町に住んでいたが、刻々侵水がひどくなって、やがて水が床上にまできそうになってきた。そこに学生達がズボンをもものところまでまくりあげ、濁流の中をバチャバチャいわせながら、手伝いに来てくれた。地獄で仏とはこのことであった。学生達は畳をはがして高いところに積みあげてくれたが、そのときのことであった。一人の学生がかつきあげた畳の端が机の上に積んであった原稿に触れたからたまらない。原稿はアツという間に濁流の中に落ちて流れていった。幾日もかかって書いた原稿が一瞬にしてフイになったことは残念といえば確かに残念であったが、それにも拘らず、そのときのわたしにとっては、濁流の中をわざわざ手伝いに来てくれた学生達の好意の方が嬉しくて、そんなことは大したことではないように思われた。原稿はあとで又締切りをのばしてもらって書きなおしたが、この時のことはわたしの長い執筆生活の中で忘れることのできない一駒であった。

書物を書けば出してくれるところはあったが、情ないのは当時すでに検閲がひどくなっていて、思ったとおりに書けないことであつた。思ったとおりに書けば、理由にもならぬ理由をつけて治安維持法にひっかけられるのが落ちであつた。そのために、この頃書いたものは、自分の主張はなるべく出さないようにして、ただ資料に物をいわせるといったものが多かった。これは研究者としてまことに不本意なことであつたが、合法の枠のなかでは仕方

のないことであつた。このように遠慮し、遠慮し書いたものでも、後に憲兵隊につかまつたときには、やはり治安維持法違反容疑で問題にされた。

しかし、書くことの方には枠があつても、口でしゃべる方は相手が信用できる人なら枠はなかった。そこで心を許した学生達には、割合考えたとおりのことをしゃべつた。学生達の間ではそれが面白いということで研究会をつくつて、大いに語ろうということになった。ファシズム研究会が出来たのは、こうしたいきさつからであつたと思つている。後に実業界にはいった石田磯次君や今、広島で幼稚園の園長をやっている山崎久史君、ついこの間まで京都大学教養部で教授をしていた岡田良夫君など、皆この研究会の熱心なメンバーであつた。なかでも岡田良夫君のごときは、わたしが同志社をやめて後も、何かファシズムについてわからないうことがあつたと、わざわざわたしのところに電話で問い合わせる始末であつた。今では彼は立派なファシズムの研究者になり、昭和四九年五月には、バーム・ダットの「ファシズムと社会主義革命」の訳書をミネルヴァ書房から出すまでになつた。わたしは無限の感概をこめて、彼の訳書のためにブック・レビューを書いたものである。彼もまたファシズム研究会のことが懐しかったとみえて、そのことについて訳書のとがきに詳しく書いてある。

又、その頃の学生のなかには、わたしが同志社をやめて四〇年にもなろうとしている今日まで、忘れずに毎年春になると菜の花漬けを送ってくれる人がある。わたしは菜の花漬けが送られてくる度に同志社のことをおもひだし、それを送ってくれた人の顔は

もとより、その他の学生達の一人、一人の顔を思い浮かべている。もっとも今ではそれらの人々はどこごとく壮年になっており、なかには物故した人さえもいるのであるが……。

わたしがファシズムについて自分の考えどおり心おきなく書けるようになったのは、戦後になってからであり、岩波新書の「ファシズム」や、青木新書の「現代のファシズム」は、その産物であるといえる。しかし、これらの書物の基礎に横たわっているものは、すべて同志社時代の研究である。

三

わたしは戦争中関東軍の憲兵隊につかまって、三年近くも獄中で暮したので、そのときの苦勞をもとにして考えると、若い頃同志社で受けたファシズムの弾圧など、物の数でないような気がする。そこではいろいろ不愉快なことはあっても、胸元に拳銃を突きつけられるような、際どいことはなかったからである。それでも同志社での体験は、わたしが身をもって受けとめたさいしょの弾圧であつただけに、消しがたい印象となつてわたしの脳裡に残っている。

わたしが同志社にいつた昭和六年という年は、日本が満州侵略に乗り出す年であつたから、反動的風潮は日本全土に高まつていた。そしてこのような風潮は、日本が満州を占領して、その侵略のほこ先を中国本土に向けてに及んで、もはや抑えがたいものとなった。ファシズムの黒い翅が抵抗しがたい力をもって、日本の喉首を絞めつけはじめると、国内の右翼勢力はわが世の春とばか

りに勝手気儘なことをやりだした。そのころはこの大学でも配属将校というものがあつて、学生の軍事訓練に當っていたが、そういう将校の中には粗暴で、手のつけられないようなものがあった。同志社大学の予科に配属されていたK中佐のごときも、その一人であつた。かれは昭和十二年四月、場所もあらうに、入学式の壇上からキリスト教主義と自由主義に対して罵詈雑言を浴びせ、同志社の建学の精神そのものを頭から否定した。同志社はキリスト教を徳育の基本とする学校であるから、柔剣道の道場に神棚がないのは当然であるにもかかわらず、

「同志社の道場には神棚がない。これは同志社が反国体的な教育をおこなっている証拠だ」

と愚にもつかぬことをいって、学生達を煽動した。煽動された予科の学生達は、前後の見境もなく、湯浅総長の退陣を決議して恥しない有様であつた。

しかし、ファシシヨ的潮流に押し流されて動きだしたのは、一部の学生達だけではなかつた。教官達の中にも同じような動きをする人達があらわれてきた。キリスト教を徳育の基本とする学校である同志社にとつて、その精神的な中核ともいへべき学部——他の学部でどんなに動揺がおこつても、事、キリスト教に関してはここだけは本来どんな動揺もおこつてならない筈の或る学部の教授のなかにさえ、時流に迎合して憚らぬものが現れてきた。その学部の或る有力教授のごときは、キリスト教に対する風当たりがひどくなると、急に伊勢の皇太神官への参拝をはじめた。あげくの果には、

「キリスト教と神道とは両立する」

などと、途方もないことをいい出した。これは明らかに、保身のためにはキリスト教を投げすて、ファシズムの足下にひれ伏すことを、少しも恥と思わぬ行為であった。新島先生が生きておられたら、これを何と御覧になるであろうかと思うと、わたしは、はらわたの煮えくりかえる思いであった。

しかし、問題はよその学部だけでなく、わたしの所属していた学部でもおこった。ファシシヨ的な風潮の高まりを利用し、それに便乗して、学部内の進歩勢力を一掃しようとする動きが、すなわちそれであった。問題の発端は田畑忍君の憲法学説にケチをつけ、これを反国体的な学説として、排撃するところから始まった。田畑君は京都大学事件でやめた佐々木惣一先生の弟子だから怪しからんといった、およそ愚にもつかない理由をふりかざして田畑君の排斥をはじめたので、

「何をいうのだ。なんでそれが悪い？」

と、わたしらとしても田畑君擁護に立ちあがらざるを得なかった。こんなことで田畑君を排撃しようとするものと、擁護しようとするものとで学部は二つに割れ、酷烈な闘争がつづいた。それは自由を押し潰そうとするものと、それを守ろうとするものとの闘争であった。その間自由を押し潰そうとする側では、学内の反動勢力はもとより、学外では憲兵隊や洛北青年同盟という右翼団体にまで手を廻して、自由を守ろうとする人々の追い出しを図った。そしてそれを端的に示したものが、それらの人々をやめさせると当局に迫った上申書事件であった。自由を守ろうとするもの

はみんな赤で、反国体思想の持主だから、やめさせる必要があるというのであった。

当時総長は湯浅八郎先生であったが、先生は同志社の建学精神を身をもって体現したような気骨のあるクリスチャンであった。賢明な先生は問題の所在がどこにあるかは、いち早く見抜いておられた。しかし、ファシズムの暗雲が日本全体をおし包んでいた情勢の下では、ふつうの時のように、問題の解決は容易ではなかった。先生は散々考え抜かれたあとで、どういふ手蔓でそういうことを思いつかれたのか知らないが、当時憲兵隊司令官をしていた中島今朝吾中将をひっぱってこられて、この人に問題の解決を依頼された。

同志社にやってきた中島司令官はわたしらを一人ずつ呼び出して、

「どつだ。君の進退を俺にあずけてくれんか？」

といった。他の方がどんな応待をされたかわたしは知らないがわたし自身は憲兵隊司令官が乗り出してきた以上、ただでは済まないだろうと思っていた。そこでわたしは司令官に会う前から最後の腹をきめていた。それで司令官から前記の話があったときも、言下に、

「結構です。お任せしましょう」

と答えた。憲兵隊司令官に辞表をあげることを約束したのでから、同志社ももうこれまでと思つて、わたしは京都を引きあげ準備をしていた。ところが、どうしたわけか、中々やめるといつて来ない。

「おかしいなア」

と思っていたら、その間、湯浅総長がわたしを同志社に残すためにいろいろ心を砕いておられたらしいのである。そして最後に到達された苦肉の策が、わたしを東京の国民精神文化研究所に一時内地留学させることであった。国民精神文化研究所というのは国体思想の研究所で、いわば体のいい思想的感化院であった。本人はこの研究所にいつて洗脳しましたということにすれば、わたしを同志社にとめておいたところで、ファッショ勢力からの攻撃をかわすことができるだろうというのが、その狙いであった。

そこで同志社当局では、わたしがこの提案をうけいれて、国民精神文化研究所に留学することを熱心に慫慂された。同志社当局の温情はわかりすぎるくらいわかっていたし、わたしはその温情に対して心から感謝した。それにもかかわらず、わたしはこの提案を受けいれることを拒否した。国民精神文化研究所に行くことは、自分のそれまで抱いていた思想の間違いを自認するに等しいと思っただからである。わたしは自分の考えを間違っているとは思っていなかったし、したがって国民精神文化研究所に行く気など毛頭なかった。

しかし、同志社当局のせつかくの提案を拒否する以上、その責任をとる必要があると考へ、キッパリ辞表を出してやめることになった。その後わたしは或る人の世話で満鉄調査部につとめることになったが、わたしが大連に渡ってからのことであった。わたしは湯浅総長からの温情あふれるお手紙を受けとった。又そこではどうした運命のいたするか、かつての憲兵隊司令官で、当時第十

六師団長として南京攻略に参加した中島中将との再会の機会をもつことができた。満鉄の或る重役から中島師団長が会いたがっているから会ってやってくれと電話がかかったときには、我と我が耳を疑ったほどであった。しかし、会ってみると、かつての怖いおじさんも、いいおやじさんであった。

「君はあのとき何のためらいもなく、言下に僕に辞表をあげるといつてくれた。気に入ったよ」

というわけで、一晩ゆっくり杯を汲みかわして、帰ってきた。その中将も今はもう故人となられ、いつの間にかわたし自身がそのときの中将の年を上廻るような年になっている。感慨無量である。

ファシズムは来り、ファシズムは去った。しかし、ファシズムは今もなお同志社とともに、わたしの思い出の中にある。
(長崎大学長)

* * *

具島先生は、昭和六年九州大学から同志社に赴任され、法学部政治学科で政治学を担当、十二年同志社を辞任して満鉄調査部に入社。戦後九大に戻り、法学部教授、法学部長をつとめ、昨年長崎大学学長に就任された。ファシズムの研究の権威で、多数の著書がある。

戦時中の同志社を顧みて

有賀鉄太郎

一

戦時中の同志社の思い出を書くことを依頼され、一応承諾をしたものの、いよいよ書くころとしてみると、それがなんとむずかしい課題であるかを思わせられた。もとより自分の関係してきたことに限定しての回顧しか私にはできないのではあるが、それにしても、終戦後すでに三十年を経た今日では、資料の散逸もあり、記憶の薄れも手伝って、どんなことをどのように記したらよいか、あれこれと迷いもした。まず、可能なかぎり手近な資料を整えてもみたが、それがかえって問題をむずかしくしたとも言える。いずれにせよ、自分のうちに残っている記憶や印象を、記録によって客観的に確かめながら、今書きたいと意図するところにしたがって、筆を進めるよりほかはない。

ところで、戦時中と言っても、それをどう歴史的に区画すればよいか。その終点を一応一九四五年に置くことにはあまり異論

はないとしても、その始点をいつにするかということには当然問題がある。宣戦という形式は、一九四一年にとられたのであるが、いわゆる支那事変、満州事変というものも明らかに戦争であって、当時すでに海外の論評では *undeclared war* という表現を用いていた。とすれば、日本の戦時体制は少なくとも一九三一年までに、ある程度の整備がなされ、一九三七年以後それが著しく強化されたとみるべきであろう。そして、それがいわゆる大東亜戦争へと進展したのち、悲惨な破局へと突入するに到ったのであるから、一九三一―一九四五年を一つの時代区分とみることとは十分可能である。「戦時中の同志社」ということも、そのような関連において考えなければならぬであろう。

だが、その「戦時中」の同志社の前にも、またその後にも、同志社はあったのであるから、戦時中の同志社について語るとしてもその前後のコンテクストから離して、それをすることはできない。少なくとも私自身にとっては、それは不可能である。私が神

学を志望して同志社大学神学部予科に入學したのは一九一七年のことであり、その後一九二六年から一九四八年まで二十二年間、専任教師として私なりに力をつくしたのであったから、私の回想は、当然その三十一年間の同志社における生活体験を基盤としての、そのコンテクストのもとにおける回想とならざるをえない。ところで、その一九一七年というのは第一次大戦の終盤期に当り、この年にロシアには二段階の革命が起り、また、アメリカはまずドイツに対し、ついでオーストリアに対して宣戦を布告したのであった。そして、翌一九一八年十一月に至って、連合国側の勝利ということで戦争は終結した。日本は当初から連合国側に味方していたが、このことは、西欧的自由主義および民主主義の大幅な導入を容易にしたのであった。いわゆる大正デモクラシー的風潮は、このような条件のもとで興隆したのであった。それは主として都市知識層の間に広がったが、労働運動や農民運動の急速な展開も、それと無関係ではなかった。

私が入學した頃の同志社は、そのような時代における同志社であった。青春期の精神的昏迷と苦悩のうちに「白樺」に触れて曙光を見出し、そのトルストイ的影響のもとにイエスの言葉に接するに到り、そこに自分の行くべき道を見出した私であったので、同志社をつつむ、自由な、そしてデモクラティックな雰囲気は、他のどこにも求められない勝れた魂の道場を提供するものと思えたのであった。事実、そこには大正デモクラシー以前からの、明治八年（一八七五）以来のキリスト教的自由主義の精神が流れていた。自由、自治、平等、人格尊重というようなことが、そこでは

すでに論議の余地なき公理になっていたのである。いわゆる三大節にも出席は自由であり、御真影もなかったのだから、不敬事件も起りようがなかった。私が入學した頃の総長（当時は社長と言った）は原田助先生で、トルストイを訪問したときの話を、その時贈られたステッキを見せながら、聞かせてくださった記憶もまだ鮮やかである。先生はトルストイアンではなかったが、経験豊かな国際人であった。その後、大正九年（一九二〇）には海老名弾正先生が総長に迎えられたが、この人は予言者の思想家で、日本の歴史を動的発展の相のもとにとらえ、明治維新は封建的社会からの近代国家の誕生であり、さらに第一次大戦を経た今は、ナショナリズムがインターナショナルナリズムへと脱皮すべき世界的時期であると論じていた。その気概をもって同志社に赴任した彼は、あたかもその年にそれまでの私立同志社大学が、「大学令」による大学として認定されたこともあって、とくに大学教育の拡充のためにあらゆる努力を惜しまなかったのである。

二

だが、第一次大戦後の日本の国家のおよび社会的状況は、決して単純ではなかった。くわしいことは、ここでは論じるとまがないが、一方に国際化、および民主化の傾向が強まり、軍縮も実行される時代において、それに対する国家主義、また国粋主義からの反撥もまた当然あったのである。当時の国際的力学関係から言っても、軍縮と国力の維持とをどう調整するかは、専門家たちにとってむずかしい問題であったに違いない。私は、一九二二年

から三年あまりアメリカに留学して、帰国したのは一九二五年（大正十四年）晩秋であったが、この間にも、日本の社会的および理想的動向に変化が起っているのを見逃すことはできなかった。一方にはマルキシズムの影響の拡大があり、他方には学校における軍事教育の進出があった。そのいずれもが、同志社のキリスト教的自由思想にとつては問題を投げかけたのであるが、ここには戦時体制への前兆としての後者について一言したい。

私は、一九二六年四月から母校の教壇に立つことになったが、すでにその頃には、大学に陸軍々々が軍事教育のために配属されていた。予備か後備の将校が、その任に当たったのであるが、それは、徴兵制度のもとにいずれは兵役に服すべき学生たちに、あらかじめ軍事教育を授けて、かれらが入隊後、幹部候補生に進む条件を有利にするためのものであった。最初に来た配属将校は慎重な人物で、できるだけ同志社の校風になじみ、キリスト教も理解しようと努めていたので、問題は起らなかつたが、その後任に来た人は、積極的に軍事思想を高揚することを使命と感じていたようである。かれは、海老名総長に進言して、全同志社の観閲式を催すことを勧め、先生はそれに快諾を与えたのである。先生にとつては、それは軍国主義でもなんでもない、一つの祭典かパレードに過ぎないものと思われたらしかつた。一九二八年一月十六日（月）のことだったが、新聞によつて始めてその計画を知つた私は、そこに何か不吉な方向性を感じて、これはいけないと思つた。当時の軍事教練は選択制であつたから、それを選択した学生たちだけの閲兵というだけなら、そういう「学課」を既成事実と

して認めている以上、文句は言えなかつたが、この企画はその階界をはるかに逸脱して、大学、予科、高商、中学校、女学校を含む全同志社の教職員、学生、生徒のすべてを集合させて、配属将校倉茂大佐指揮のもとに、海老名総長の観閲を受けさせるというのである。その報を手にして、まず反対を声明したのは法学部の中島重教授であつた。神学科の学生会も反対の意思を表明して、これに呼応した。法学部の若手教師たちも連名で声明文を出した。神学科では魚木忠一、村岡景夫と私の三者の名で、それが同志社精神に反するものであるとの声明文を三ヶ所に掲示した。その形勢のもとに、その日の午後四時ごろ部長会議が開かれて、観閲式は「考慮のため延期」するとの決議をしたので、自分たちも掲示を撤去した。

ところが、一月十八日の毎日新聞京都版を見ると、この事件に関連して、「二部教授たちの総長をとりまく数人の人々に対する反感もともなつて」ということが書かれていたし、かたがた学生の一部には総長不信任運動が起りかけていたので、私は魚木、村岡両君と相談の上で、「われわれが反対したこととは決して、総長への不信任、もしくは他の何人に対する反感をも含むものではない。われわれは海老名総長がわれわれと同じ理想を持つクリスチャン・インターナショナルスト、また平和主義者であることを信ずるものである」との趣旨を原稿にして毎日新聞に送ることにしたが、中島教授もそれには全く同意ということで、われわれ三人のほかに中島重を加えた四人の名で、それが出された。だがさらに、中島さんを含む法学部教授たち一同は、芦田神学科主任

に会見を求め、その日の午後に関かるべき部長会議で、たんに「考慮のための延期」ではなく、はっきり「中止」と改めるよう努力してほしいと要請した。それは学生たちの動きを心配して、是非そうしてほしいとの事だったが、その場に居合せた私も、それに同感を表した。

昭和三年（一九二八）に、すでにこのような事件が同志社で起ったのである。それは不吉な予感を私に与えはしたが、それでも、その時にはまだ軍部が開き直って何らかの制裁を加えてくるようなこともなかった。治安維持法のもとに共産主義またはそれに同調するとみられた動きに対しての締めつけは厳しくなりつつはあったが、それでもなお自由が全くなくなるまでには時を要した。

昭和五年（一九三〇）の秋には、私は同志社大学のメッセージをたずさえて北京に赴き、一ヶ月間燕京大学の客となったが、それは当時の中国学生層に高まりつつあった反日感情を憂えて、同じキリスト教主義による燕京と同志社との間に交換教授の制度を設けて両国民の相互理解を進めようという企画で私が派遣されたわけである。日本を帝国主義的侵略者として、打倒の声を挙げてやまなかった中国の青年たちに、同志社を背景として友好と和解の手を差し伸べる役目を担ったことは、私にとって忘れえぬ思い出である。燕京の教授に魚木君や私と留学先で親交を結んだ徐宝謙、誠質怡、許地山などがいたことが、この計画の背景をなしていたのであるが、とくに、徐博士はその提案者でもあり、強力な推進者でもあった。かれは徹底的平和主義者であり、日中の関係が悪化の一路を辿るなかに、ただ独り日中相互理解の道を求めて変

らなかつた。この「平和を造り出す人」に対する私の敬意は今もつるばかりである。⁽²⁾

この事について、それ以上にここに語る余裕はないが、その時にはまだそのような計画が可能であり、政府も社会も、それに対する好意を示しこそすれ、妨害をするような動きは感じられなかつたということを含めて添えておきたい。ところが、その翌年（一九三二）に満州事変が起されて、事態はたちまち一変した。燕京大学との関係も、それ以上進展させる術も殆んどなくなってしまった。

三

昭和四年十一月に就任した大工原総長は同九年三月に急逝され、翌十年（一九三五）二月には湯浅八郎博士がその後任者となった。湯浅さんは、それまで京大農学部教授であったが、瀧川幸辰教授を支持したというので、文部省からは容共と目されていた。湯浅さんとしては、自由のために戦うこそ同志社人の使命と考えていたわけであるが、それは風にさらうだけでなく、やがては潮にさらうに等しい難航路となつてゆく。高商での、いわゆる神棚事件を始めとして、軍部や右翼の、手をかえ、品をかえての非難や要求や威しが加えられてきた。とくに一九三七年以後は、公然と戦時体制の強化が行われたのであったから、湯浅さんはその年の末ついに同志社を去った。そして翌一九三八年十二月には、インドのタンバラムで開かれた世界宣教会議に、日本からの議員のひとりとして出席したが、そのあと、その会議の委嘱で、

ヨーロッパおよびアメリカの各地を巡回した。そしてそのままアメリカに留まって戦後まで帰国しなかった。

たしかに湯浅さんを容れることのできない当時の日本であったが、志は同じでも海外に逃れる機会のない人たちが、自由のために何をすることができたであろうか。いうまでもなく、「支那事変」は「大東亜戦争」へと発展し、同志社からも次々に応召者が出たし、大学は名実ともに軍事訓練の場に変っていった。天照大神と現人神（あらひとがみ）天皇とを皇道哲学の中心に置くことによつて、思想的総動員が強力に進められているなかで、どこまで信教の自由を守れるのか、またどこまでキリスト教（世界の創造者としての神、また救世主としてのイエス・キリストに対する信仰）を守りぬくことができるのか、それは絶えず私たちにつきつけられた難問であった。省みて、そこには余りに多くの妥協が強いられ、または——そこにいかなる心中留保があつたにせよ——あえて試みられもしたのであつた。

だが、ともかくも同志社は、その寄付行為から「キリスト教」の文字を削除しなかつたのである。それを留めることがいかに困難だったかは、今では想像もできなからうが、同志社の場合でも牧野総長の老練な柔軟性に負うことなしには、それは不可能だつたであろう。

もう一つ、同志社のキリスト教に関連して、神学科の問題があつた。これは主として政府の宗教政策（思想および団体統制の一環としての）がもとで、まず、キリスト教の諸教派の統合としての日本キリスト教団が昭和十六年（一九四一）に成立し、翌十七年には

神学校の統合が教団当局よつて呼びかけられた。同志社も、神学科を解消して教団立神学校に合流せよとの強い要請を受けたが、同志社は大学の一部としての神学科を放棄する理由を見出せなかつた。私は、富森神学科主任を補佐して、その問題に深くかわかることとなり、教団関係と同志社当局との間に立つて、さまざまな接衝にも当たつたが、その結果だけを述べれば、教団としては、東京に東部神学校と女子神学校とを設け、関西に西部神学校を置くことになり、同志社はこれまで通り、大学文学部神学科を維持することになった。西部神学校は関西学院に置かれていたが一年後には東部に吸収された。これが今の東京神学大学の前身である。この間、富森先生が多大の心労をされたことはもちろんであるが、十二月には、その学年末で主任を辞めたいとの意思を表明された。

その後、あれこれと論議の末、私に主任をやれということになり、十八年（一九四三）四月からその任に就いたが、やってみて、それが容易ならざる仕事であることを痛感させられた。その詳細について語る紙数はもはや残されていないが、私としては最善の努力を払つたと思つている。それだけにまた終戦ののち、自分の信仰を内省して、その暗黒のなかの現実が、したがつてそれへの対処が、あまりにも複雑多義（ambiguous）であつたことを思わざるをえなかつた。たとえば、当時の松山三郎講師のことに關して、それが言える。かれは応召中であつたが、昭和十九年七月に本人も黒川大学長も、主任の私も知らないうちに、解職の手続きがとられていた。二十年三月になつて始めてそれを知つた私は、

それを甚だ遺憾として、そのいきさつを調査したが、これは文部省が人文系私学の縮小を計るため、退職金の援助を約束して人員整理を要請したのに応えて、少数の者だけで秘密のうちに行われたものと分った。もとより同志社の立場も苦しいところであった。そこで、私は神学科教授会の意をうけて、総長兼大学長であった牧野先生に、松山君が帰還した上で復職させることを約束してほしいと迫ったが、先生も熟慮の末、それを婉曲に示唆するよ³うな文面の手紙を、留守家族にあてて書いてくださった。

松山君が戦地で解職のことを知ったのは、ちょうど遺書をしたためたときだったという。かれは終戦後無事復員したが、ついに同志社にもどってはくれなかった。かれとは今でも親しくしている。けれども、その時のことを思うと心は暗い。このような時代が二度とあつてはならないと思つてゐる。

(大正十一年大学神学部卒、元大学神学部長)

注(1) この訪問については、「原田助遺集」(昭四六)一七〇—一七二ページに記されている。トルストイの杖は、今は同志社に保管されている。

(2) 徐君の専門は哲学、誠君のは新約学であった。許君は博識で日本語も読み、サンスクリット学者でもあった。また作家としても知られ、その短篇集の日本訳を吉川幸次郎博士から借りて読んだこともある。一九四

(3) 一年、香港でなくなったが、その「選集」二巻が一九五八年北京で出された。

正確には松山君の岳父大原五一氏宛である。松山君は神学科卒業後助手となり、さらにイェール大学およびベルリン大学で実践神学の研究をした人で、神学科には是非必要な人であった。三月九日の神学科教授会では、同君と村上俊講師とを助教授に、また山崎助教授を教授にする件を可決している。村上君は応召して千島で終戦を迎え、樺太で捕虜生活をしているうちに、自分が切った大木が倒れおちるのを避けかねて、痛ましくも命を失った。これも大きな損失であった。

